

## Morphology and Lexicon Forum 2007 (MLF2007) プログラム

2007年6月30日(土)、7月1日(日)

神戸大学 瀧川記念学術交流会館 2階大会議室

会場の案内：<http://www.kobe-u.ac.jp/info/access/rokko/bun-ri-nou.htm#themap>

6月30日(土) 受付 13:00～				
1	13:30-14:10	秋田喜美	神戸大学大学院	日本語音象徴の音韻形態への構文文法的アプローチ
2	14:10-14:50	中村たか子	神田外国語大学非常勤講師	状態述語としての「VN する」—「意味する」は状態を意味する
休憩				
3	15:00-15:40	関敬一郎	大阪経済大学・京都大学非常勤講師	英語の心理動詞と知的行為動詞の中間構文：イベント間の相互関係の観点から
4	15:40-16:20	宮本大輔	東京大学大学院	英語道具中間構文の語彙意味論的分析
休憩				
5	16:30-17:10	加藤敏三 黒田航	信州大学 情報通信研究機構	「N を始める」では何を始めるのか
6	17:10-17:50	眞鍋雅子	神田外国語大学大学院	トイウと2つのタイプの心理動詞について
懇親会 18:00～20:00 瀧川記念学術交流会館 1階食堂				
7月1日(日)				
7	10:00-10:40	岸本秀樹	神戸大学	形容詞「ない」の語彙化に関する一考察
8	10:40-11:20	黒木暁人	東北大学専門研究員	日本語右方転移文の左方移動分析：情報構造の観点から
休憩				
9	11:30-12:10	星宏人 杉岡洋子	秋田大学 慶應義塾大学	Agree, Control and Complex Predicates
昼食*				
招待講演	13:30-14:20	竹沢幸一	筑波大学	不定詞節を伴う認識動詞構文の言語間比較：動詞分類と経験者句の統語的役割
	休憩			
	14:25-15:15	青柳宏	南山大学	Causatives Meaning Passive Revisited: Toward a unified account of morphological causatives and passives in Korean
休憩				
12	15:25-16:05	依田悠介	大阪外国語大学大学院	現代日本語の格配列と認可のプロセス—分散形態論の枠組みから見えるもの—
13	16:05-16:45	金京愛	京都大学大学院	現代韓国語の2種のアスペクト形式における「存在」意味の相違—<ko iss>、<e iss>と存在動詞< iss>との関係

\*日曜の昼食は各自ご用意ください。(会場の近くに食事のできる場所はありません。)

# MLF2007

要旨集

2007.6.30-7.1

神戸大学

## Morphology and Lexicon Forum 2007 (MLF2007) プログラム

2007年6月30日(土)、7月1日(日)

神戸大学 瀧川記念学術交流会館 2階大会議室

会場の案内：<http://www.kobe-u.ac.jp/info/access/rokko/bun-ri-nou.htm#themap>

6月30日(土) 受付 13:00～				
1	13:30-14:10	秋田喜美	神戸大学大学院	日本語音象徴の音韻形態への構文文法的アプローチ
2	14:10-14:50	中村たか子	神田外国語大学非常勤講師	状態述語としての「VN する」—「意味する」は状態を意味する
休憩				
3	15:00-15:40	関敬一郎	大阪経済大学・京都大学非常勤講師	英語の心理動詞と知的行為動詞の中間構文：イベント間の相互関係の観点から
4	15:40-16:20	宮本大輔	東京大学大学院	英語道具中間構文の語彙意味論的分析
休憩				
5	16:30-17:10	加藤敏三 黒田航	信州大学 情報通信研究機構	「N を始める」では何を始めるのか
6	17:10-17:50	眞鍋雅子	神田外国語大学大学院	トイウと2つのタイプの心理動詞について
懇親会 18:00～20:00 瀧川記念学術交流会館 1階食堂				
7月1日(日)				
7	10:00-10:40	岸本秀樹	神戸大学	形容詞「ない」の語彙化に関する一考察
8	10:40-11:20	黒木暁人	東北大学専門研究員	日本語右方転移文の左方移動分析：情報構造の観点から
休憩				
9	11:30-12:10	星宏人 杉岡洋子	秋田大学 慶應義塾大学	Agree, Control and Complex Predicates
昼食*				
招待講演	13:30-14:20	竹沢幸一	筑波大学	不定詞節を伴う認識動詞構文の言語間比較：動詞分類と経験者句の統語的役割
	休憩			
	14:25-15:15	青柳宏	南山大学	Causatives Meaning Passive Revisited: Toward a unified account of morphological causatives and passives in Korean
休憩				
12	15:25-16:05	依田悠介	大阪外国語大学大学院	現代日本語の格配列と認可のプロセス—分散形態論の枠組みから見えるもの—
13	16:05-16:45	金京愛	京都大学大学院	現代韓国語の2種のアスペクト形式における「存在」意味の相違—<ko iss->、<e iss->と存在動詞< iss->との関係

\*日曜の昼食は各自ご用意ください。(会場の近くに食事のできる場所はありません。)

# 1. 日本語音象徴語の音韻形態への構文文法的アプローチ

秋田喜美  
神戸大学大学院

日本語音象徴語（擬音・擬態語）の語形成については、「にゃん」や「どっきり」のように1拍あるいは2拍の語根が基になっていること（Hamano 1998）、また、幾つかの固定化した音韻形態鑄型が認められること（山梨 2000）が知られている。ところが不思議なことに、各音象徴語根（1拍：135個；2拍：629個）が入りうる鑄型をリストした研究は見当たらない。そこで、本論はまずその網羅的記述を提示し、そのデータに意味論的観点を加えることで、呂(2006)が示唆する、上述鑄型を「構文」（その部品の合計から完全に予測することのできない意味を担う形式；Goldberg 1995）と見なす分析を、以下の点に着目し実証的に突き詰める。

まず、なぜ派生分析（田守・スコウラップ 1999 等）ではなく構文分析なのか？ 一つの大きな理由は、例えば「うっとり」の意味が同じ語根由来の「うとうと」の意味から予測しきれないことだ。また、音韻論（Davis & Ueda 2002 等）で強調副詞と呼ばれる(C)VCCVriの音象徴語でさえ、「てつきりキ\*てきり」のようにその「非強調形」が存在しない例が多いこと、更に、(C)V^CV(C)VCVの音象徴語に「反復性」「継続性」「集団性」という共通の意味を見出せるように、構文の体系的多義性が観察されることも構文分析を支持する。

では、どんな意味の語根がどの構文に生起可能なのか？ また、各構文の意味とはどんなものなのか？ 上述リストを意味分類してみると以下の数値が得られる。

(C)VCV 構文	(C)V^CVCVCV	(C)VCVCVCV	(C)VCV^Q	(C)VCVN^	(C)VCV^ri	(C)VCCV^ri
擬音語根	88.30%	<b>14.62%</b>	70.18%	<b>33.92%</b>	26.32%	<b>8.77%</b>
擬態語根	72.73%	38.50%	50.27%	<b>13.90%</b>	25.13%	<b>23.53%</b>
擬情語根	74.32%	33.78%	39.19%	<b>10.81%</b>	17.57%	<b>25.68%</b>
計	76.63%	30.84%	50.90%	<b>18.76%</b>	24.17%	<b>20.03%</b>

注：^=アクセント核；Q=促音；N=撥音；擬情語=「どきどき」のように身体感覚や感情を表す音象徴語

表で斜体にした箇所に注目する。第一に、「た<sup>△</sup>じた<sup>△</sup>じ」のような(C)VCVCVCVは擬音語根を嫌う傾向が見られるが、これはこの構文が（結果構文やコピュラ文に生起することが示すように）属性的意味を持ったための（動静性・類像性の）不適合と言える。第二に、「ころん」の(C)VCVNと「ほんのり」の(C)VCCVriの頻度が相対的に低い、更に見ると、前者に入る約半数が擬音語根である一方、後者は擬音語根を嫌っている。この低頻度と（形式と意味の関係が直接的な擬音語根を嫌う点に見られる）低類像性が(C)VCCVriを他よりも一般語彙らしく感じさせると分析できる。

次に、2拍語根が取りうる構文の平均数を見ると、擬音2.48>擬態2.36>擬情2.07と、意味の抽象性が増すほど減少することが窺える。これは、類像性が高い語ほど創造性が高く形態的柔軟性が増すためと説明できる。

以上のように、本論は音韻形態と意味のインタフェイスとして、音象徴語の音韻形態と類像性の関わりを、構文分析を通して分析する。

## 参考文献

- Davis, Stuart and Isao Ueda. 2002. Mora augmentation in Shizuoka Japanese. In Noriko Akatsuka, ed., *Japanese/Korean Linguistics* 10, pp. 392-405. Stanford: CSLI.
- Goldberg, Adele E. 1995. *Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure*. Chicago: University of Chicago Press.
- Hamano, Shoko. 1998. *The Sound-Symbolic System of Japanese*. Stanford: CSLI.
- 呂佳蓉. 2006. 『擬音語・擬態語の比喩的拡張の諸相：認知言語学と類型論の観点から』博士学位論文、京都大学。
- 田守育啓・ローレンス・スコウラップ. 1999. 『オノマトペ：形態と意味』くろしお出版。
- 山梨正明. 2000. 『認知言語学原理』くろしお出版。

## 2. 状態述語としての「VN する」－「意味する」は状態を意味する

中村たか子

神田外語大学留学生別科非常勤講師

本研究は日本語の「VN する」の分類について検討し、「意味する／位置する」などが、これまで平尾 1990 や影山 1993 など考察されてきた「研究する」などの他動詞、「散歩する」などの非能格自動詞、「誕生する」などの非対格自動詞のどれとも異なる状態動詞として、別のクラスを形成していることを記述的に示し、その特徴を明らかにするものである。

具体的には、以下の(1)～(5)の検証テストを行い、「意味する／位置する」といった「VN する」が、その前にヲ格を取る他動詞タイプ（意味する）であっても、ヲ格を取らない自動詞タイプ（位置する）であっても、「研究する／散歩する／誕生する」といった他動詞、非能格自動詞、非対格自動詞（活動・変化動詞）とは意味的にも統語的にも異なった、「状態動詞」として振る舞うことを各データから示す。

(1) 「する＝している」（状態の意味を表す現象）

- a. 桜の開花が春の到来を意味する。＝ 桜の開花が春の到来を意味している。
- b. 女の子がダンスを練習する。≠ 女の子がダンスを練習している。
- c. 長男が誕生する。≠ 長男が誕生している。

(2) ある時空間の状況を表す表現との共起の可否（状態性の有無）

- a. \*3 月下旬上野公園で、桜の開花が春の到来を意味する。
- b. 昼休み学校で、女の子がダンスを練習する。
- c. 早朝病院で、長男が誕生する。

(3) 「受身化」の成立の可否（主語の意図性の有無）

- a. \*桜の開花によって春の到来が意味される。
- b. 数人の教師によって問題が作成される。
- c. \*車によって谷底に転落される。

(4) 「の」名詞化テスト（項の表出などの統語的観察）

- a. \*桜の開花の春の到来の意味
- b. 数人の教師の問題の作成
- c. 車の谷底への転落

(5) 時を表す副詞表現「の際」との共起の可否（事態性）

- a. \*桜の開花が春の到来を意味の際
- b. 数人の教師が問題を作成の際
- c. 車が谷底へ転落の際

さらに「示唆する／所有する」など、状態動詞でありながら主語の有生／無生によって意図性の有無が観察される「VN する」の存在を確認するため、(6)のテストを追加する。

(6) 有生／無生主語の「てみる」との共起の可否（非対格／非能格の区別）

- a. \*桜の開花が春の到来を意味してみる。  
\*政府の発表が国交回復を示唆してみる。  
\*科学者がある物質の危険性を示唆してみる。
- b. 数人の教師が問題を作成してみる
- c. \*車が谷底に転落してみる。

(6)により、活動・変化動詞と同様に状態動詞の「VN する」にも主語の有生／無生が述語の非対格／非能格的振る舞いの一つの座標軸となることを示し、動詞分類の観点から状態動詞も非対格的な振る舞いをする「意味する／位置する」などと非能格的な振る舞いもする「示唆する／所有する」などに分けられるとの結論を得る。

以上の観察に加え、先行研究で指摘される VN とスルの間の「ヲ」挿入について、「ゆれ」（「誕生（？）を）する」が見られる活動・変化動詞とは異なり状態動詞の「VN する」には「ゆれ」が見られない（「意味（\*を）する」）ことにも言及する。

本研究で観察された、状態動詞としての「VN する」の存在は、金田一 1950、工藤 1995 などの先行研究に鑑みても妥当なものであると思われる。

### 3. 英語の心理動詞と知的行為動詞の中間構文： イベント間の相互関係の観点から

関 敬一郎

大阪経済大学・京都大学非常勤講師

本論は語彙意味論の立場から、心理動詞、並びに read, analyze, 等の知的行為動詞の形成する中間構文について考察する。英語の中間構文には主語に対する被作用性の制約を充たす状態変化動詞タイプと、充たさない internal causation(IC)タイプがあり、心理動詞、知的行為動詞共に後者のタイプの中間構文を形成する。又心理動詞や知的行為動詞の意味特徴は基本的に LCS 内のイベント間の関係から得られるため、意味関数 EXPERIENCE, AFFECT 等は必要ない事を主張する。まず中間構文形成では、能格交替中の他動詞文の外項 x が上位イベントで置換される二重イベント化が起こる。これにより、中間構文の LCS 内に CAUSE 関数、ACT 関数が組み込まれる事になり、中間構文の持つ潜在的動作主解釈の形成が可能となる。この事を二重イベント条件と呼ぶ。又この二重イベント条件から上位イベントが潜在化するに十分な他動性が得られるものとなる。そして次に二重イベント構造の上位イベント内のイベント項が全称量化され、上位イベントが背景化され、中間構文の形式が得られる。[x ACT(e→∇)on y]CAUSE[y BECOME[y BE-AT STATE]これにより外項の背景化という点で能格交替と中間構文を統一的に捉える事ができる。次に心理動詞では経験者項が目的語の Experiencer-Obj(EO)タイプのみが結果構文を形成するが、上記の二重イベント条件からこの中間構文形成が予測できる。'John worried me sick'I worry easily'一方でこれは継続相の副詞句の修飾を許す。'I'm worried these days'このイベントの終点が明確でないのは、心理動詞が制御を拒むイベントを表すため、中間構文においては IC 形式の LCS が下位イベント内に在ると考える。[x DO(e→∇)SOMETHING] CAUSE[BECOME[y BE-AT <WORRIED>]心理動詞内のIC形式の存在はall by one selfの修飾からも裏付けられる。'John was disappointed all by himself' 又read, analyze, 等の知的行為動詞も二重イベント文形成から中間構文形成が予測される。'Mary read the children to sleep'This chapter reads easily' しかし命令形形成や-er名詞句形成からACT関数が参入する。'Read the book!, A reader'又for前置詞句の修飾を許すことから'John read the book for 3days' 上記と同様の下位イベントを持つと考えられる。[x ACT<READ>(e→∇)]CAUSE[BECOME[y BE-AT <READ>] さらにbreakの様な状態変化動詞の中間構文では上位イベントと下位イベントのTelicityは両方共にTelicであり依存関係は下位イベントが上位イベントを基に成立している。一方心理動詞、知的行為動詞では、Telicityは共に下位イベントはAtelicであるが、上位イベントは知的行為動詞は、動作主動詞のためTelic/Atelic解釈で、心理動詞はTelic解釈となる。従ってこれらの意味特徴はLCSを基にしたイベント関係から導く事ができるため、心理動詞特有の意味関数等は必要ないと結論付ける。

主要参考文献

- Hale, Ken and Samuel Jay Keyser. 1987. A View from the Middle. Lexicon Project Working Papers 10, Center for Cognitive Science, MIT.
- 影山太郎 1996. 『動詞意味論』くろしお出版
- 影山太郎 2001. 「第1章 自動詞と他動詞の交替」 影山太郎編『日英対照 動詞の意味と構文』大修館
- Keyser, S.J. and T. Roeper. 1984. On the Middle and Ergative Construction in English. Linguistic Inquiry 15:381-416.
- Levin, Beth, and Malka Rappaport Hovav. 1995. *Unaccusativity: At the Syntax-Lexical Semantics Interface*. Cambridge, Mass: MIT Press.
- Levin, Beth, and Malka Rappaport Hovav. 2001. An Event Structure Account of English Resultatives. *Language*, vol.77 number4, 766-797.
- 丸田忠雄. 1998. 『使役動詞のアナトミー』松柏社.
- Pylkkänen, Liina. 2000. On stativity and causation. in C. Tenny and J. Pustejovsky, eds., *Event as Grammatical Objects: The Cognitive Perspectives of Lexical Semantics and Syntax*. CSLI Publications, Stanford, CA, 417-444.

## 4. 英語道具中間構文の語彙意味論的分析

宮本大輔  
東京大学大学院

本発表が分析対象とする道具中間構文とは、道具という意味役割を持ち、能動文(2)における前置詞 *with* の目的語に相当する名詞句が主語である、(1)のような中間構文を指す。

- (1) a. This knife cuts well.  
b. This pen writes well.  
(2) a. John cut the meat with this knife.  
b. Mary wrote a letter with this pen.

この構文は典型的な中間構文からの単なる拡張例として扱われることがほとんどで、その本質が十分に解明されているとは言いがたい。

影山 (2005) は、主語名詞の目的役割によって道具中間構文の適格性が決まると主張しているが、目的役割に関する条件だけでは(3)に挙げるような文が容認不可能であるという事実を正しく予測できない。

- (3) a. \*This key opens easily.  
b. \*This telescope sees well.

よって、動詞にも何らかの制約があると見るべきである。(3a) では使役交替を起こす能格動詞である *open* が、(3b)では状態動詞である *see* が使われていることに問題があると考えられる。

本発表では、生成語彙(*generative lexicon*)の枠組みを用いた理論によって道具中間構文の適格性が正しく予測可能であることを主張する。生成語彙では、状態変化動詞の使役交替の可否は、事象構造において過程事象(*process event*)が主要部 (*head*) として指定されているかどうかの違いとして説明される (Pustejovsky 1995)。また、過程動詞が持つ唯一の過程事象は自動的に主要部になる。そして、状態動詞が持つ唯一の事象は状態事象(*state event*)であって過程事象ではない。これらをもとに、以下のような仮説を提示する。

- (4) 道具中間構文は以下の2つの条件を満たす場合にのみ容認される。  
a. 動詞が、過程事象が主要部として指定されている事象構造を持っている。  
b. 主語名詞が、動詞が表す行為を目的役割としている。

この仮説によって、過程動詞や使役交替しない達成動詞が道具中間構文に生起でき、一方、能格動詞や状態動詞が使われた文はたとえ主語名詞が適切な目的役割を持っていても容認されないという事実を正しく予測することが可能である。また、動詞の事象構造の条件を満たしている(5)のような文が容認されないという事実は、主語名詞の目的役割に関する条件違反として説明されるが、これは動詞の意味指定が詳細すぎて名詞の目的役割にふさわしくない(単に殺すのではなく、有名な人物を違法に殺害するという詳細な指定を目的役割としてもつ名詞があるとは考えにくい)という点に原因を見出すことができる。

- (5) \*This poison assassinates instantly.

道具中間構文は主語が指す道具の性質を叙述する構文であり、道具は使役連鎖において過程事象に関わる参与者であるから、過程事象が主要部として指定されている動詞のみが道具中間構文に生起できると考えられる。

### 参考文献

- 影山太郎 (2005). 「辞書の知識と語用論的知識：語彙概念構造と特質構造の融合に向けて」 影山太郎 (編)『レキシコンフォーラム No.1』(pp.65-101) 東京：ひつじ書房  
Pustejovsky, J. (1995). *The generative lexicon*. Cambridge, MA: MIT Press.

## 5. 「N を始める」では何を始めるのか

加藤 鉦三・黒田 航

信州大学・独立行政法人情報通信研究機構知識創成コミュニケーション研究センター

### 【1】主張

本発表では次の主張をする。

- (1) 「N を始める」には(10a)「その場読み」と、(10b)「総称時制読み」がある
- (2) 「その場読み」の成立条件は、動作性ではなく<進行>の有無である
- (3) 「その場読み」で自他交替があるのは<進行>だからである
- (4) 「総称時制読み」の解釈は動詞補完を要する
- (5) 「総称時制読み」で自他交替がないのは、「始める」が要求する<進行>が、Nではなく補完される動詞のものだからである

### 【2】影山(2002)

影山(2002)は、(6)はあいまいであり、それは(7)のように時の副詞句を添えることにより明確になると指摘する。(A)影山はそれぞれを「着手の読み」、「活動の発生の読み」と呼ぶ。

- (6) 劇団員は芝居を始めた。
- (7) a. 着手： 劇団員は、真夜中に芝居を始めた  
b. 活動の発生： 劇団員は、高校生の時から芝居を始めた

影山は、着手の読みの場合には(8)のように自動詞構文が可能であるが、活動の発生の読みでは不可能であることを観察する。

- (8) a. 芝居を始める；芝居が始まる  
b. 冷やし中華を始める；\*冷やし中華が始まる

影山は、(B)着手の読みは「(を) する」をつけて動詞として使えるサ変・動詞由来名詞で可能であるとしている。また、(C)活動の発生の読みが可能なものを次の3つに分類している。

- (9) a. 習いごと・趣味  
ピアノを始める；ウクレレ，英語，etc.  
b. 組織業務・団体活動  
塾を始める；会社，同人誌，相談コーナー，etc.  
c. 製造販売  
冷やし中華を始める；湯豆腐，鍋料理，etc.

### 【3】議論

本発表では上の下線部(A)～(C)を見直すことにより、より深い説明をめざす。

#### 下線部(A)

加藤・黒田(2007a,b)においてすでに論じているように、「始める」の二つの意味は(10)の捉え方をすべきである。

- (10) a. その場の一回の行為  
散歩を始める（“歩き始める”の意）  
\*ピアノを始める（“弾き始める”の意）  
b. 総称時点の行為  
散歩を始める（“習慣として始める”の意）  
ピアノを始める（“商品としての取扱いを／趣味として 始める”の意）



### 下線部(B)

影山の見方では(11)が説明されない。これらの名詞は「(を) する」を許容せず動詞由来でもないが、その場読みが可能であり、かつ自動詞用法が可能である。

- (11) 映画／落語／トーク を始める
- (12) 映画／落語／トーク が始まる

これらの名詞とサ変・動詞由来名詞に共通するものは、「動作性」ではなく<進行>である。そのため、(10a)に対応するのは「Nを終える」であり、「やめる」では意図的な中断の意味になる。「終える」は<進行>の位置に言及するのに対し、「やめる」は意図的な位置取りに言及するからである。同じ理由で、解釈に動詞補完を要すると本発表が主張する(10b)では、その補完動詞が意図性を持つため「やめる」にしか対応しない。たとえば、ピアノの取り扱いは、やめるものであって終えるものではない。

### 下線部(C)

(10b)を(9)のように分類できることに関しては異議はない。問題は(13)である。

- (13) (9)の分類では、これらが全て、その場の一回の行為ではなく、日常的な活動であることを見落とすことになる。

更に言えば、例えば「を弾く」を日常的に行えばそれは「習いごと・趣味」となり、また商品の取扱いは、その動作自体が日常的な行為である。

本発表では、以上を基盤にして冒頭の(3)と(5)を主張する。(5)に関しては、「新しい本」が“新しく買った／書いた本”という解釈はあっても“新しく読んだ本”という解釈は難しいという事実も援用することになる。

- 加藤 鉦三, 黒田 航(2007a) 「「N を始める」についての考察: 英語の begin a N との比較を中心に」, 第 13 回言語処理学会発表論文集。[1月執筆]
- 加藤 鉦三, 黒田 航(2007b) 「「N を始める」についての考察: 英語の begin a N との比較を中心に」, 第 13 回言語処理学会での口頭発表, 龍谷大学。[3月発表]
- 影山 太郎(2002) 「語彙の意味と構文の意味: 「冷やし中華を始めました」という表現を中心に」, 玉村文郎(編), 『日本語学と言語学』, pp. 101-111. 明治書院。

## 6. トイウと2つのタイプの心理動詞について

眞鍋 雅子  
神田外語大学大学院

日本語の主語を経験者にとる心理動詞には、もう一方の項がヲ格をとる場合(1)と、二格をとる場合(2)がある。

- (1) 太郎は 花子からのプレゼントを 喜んだ。  
(2) 太郎は 花子からのプレゼントに 喜んだ。

Pesetsky(1990)は心理動詞に Cause>Experiencer>Target というθ階層を設けているが、杉岡(1992)は、日本語の心理動詞においても Target と Causer を区別すべきであるとする。すなわち、(1)のタイプの心理動詞のヲ格は「対象」であり、(2)のタイプの心理動詞の二格は「原因」を表すと考えるのである。

また Endo and Zushi (1993)は、心理動詞のヲ格と二格の違いを、stage level(事態レベル) 対 individual level (個体レベル) の述語の対立と捉え、(3a)の二格心理動詞は場所句「掲示板の前で」と共起しないため個体レベルの述語であるが、(3b)のヲ格心理動詞は場所句と共起することから事態レベルの述語であると説明した。

- (3) a.\*ジョンは 息子の合格に 掲示板の前で 喜んでいる。  
b. ジョンは 息子の合格を 掲示板の前で 喜んでいる。

(Endo and Zushi 1993)

本稿はこれらの先行研究を踏まえ、当該の心理動詞のヲ格、二格の項が文をとる場合、その文にトイウをとれるか否かが、「対象」と「原因」の意味役割に対応することを示す。つまり、トイウの有無は、異なる意味役割を持つ2つの心理動詞を識別することを可能にするのである。(4a)はコトを表す補文がヲ格をとるヲ格構文であり、(4b)は二格をとる二格構文である。

- (4) a. みんなは [花子が志望校に合格した] {φ・?\*という} ことを 喜んだ。  
b. みんなは [花子が志望校に合格した] {?\*φ・という} ことに 喜んだ。

(4)ではその差が微妙であるが、(5)のようにコト補文を主語位置に置き、「対象」(受身による書き換え)と「原因」(使役による書き換え)の意味役割を明確にするとその違いは明らかになる。

- (5) a. [花子が志望校に合格した] {φ・\*という} ことが みんなに 喜ばれた。  
b. [花子が志望校に合格した] {?\*φ・という} ことが みんなを 喜ばせた。

つまり、(4a)のヲ格構文からの書き換えである受動文(5a)はトイウが生起できないが、(4b)の二格構文からの書き換えである使役文(5b)はトイウが生起しやすい。

本稿ではこの違いを、「教師という仕事」のような例に見られるトイウが、tokenをtypeとして提示する機能を持つことに言及し、トイウが無い場合は具体的なtokenとしての「対象」を、ある場合は出来事をtypeとして提示し「原因」を表すことにより説明する。つまり、トイウの有無が「token」対「type」、および「対象」対「原因」の対立に連動し、「事態レベル」対「個体レベル」の叙述の対立にもつながることを示す。これは前述の日本語の心理動詞における先行研究の分析を支持する証拠を提示することになる。

## 7. 形容詞「ない」の語彙化に関する一考察

岸本秀樹  
神戸大学

日本語の否定辞の「ない」は、形容詞とまったく同じ活用を持つが、語彙範疇としての形容詞(例えば、「美しい」のような形容詞)として機能していないという直感がある。しかしながら、その一方で、「つまらない」「なさけない」などのように、「ない」が(否定の意味を持つため)いろいろな要素と結合して複合的な形容詞(否定的な意味を持つ形容詞)を作る。これらの事実は、否定的な意味をもつ形容詞「ない」が、機能範疇への変化及び複合的な形容詞の形成という二つの方向性で発展した可能性があることを示唆している。本論では、後者の過程、すなわち、形容詞の「ない」にある要素が付け加わって複合的な形容詞に発展する過程について、否定辞として機能しながらも範疇としては独立の形容詞としての働くある種のイディオムに含まれる「ない」を用いて考察することにする。

具体的には、「動詞+ない」の形態を持つ「割り切れない」「気に食わない」などの一部のイディオムに現れる「ない」が、純粋な機能範疇の「ない」でもなく、形容詞表現の語の一部になっている「ない」でもないこと、つまり、これらの表現に現れる「ない」が独立の形容詞として働いているということを最初に示す。次に、このようなイディオムの中に現れる形容詞の「ない」の間でも、組み合わせられた動詞からの引き離しの可能性などについては、それぞれ違った特徴を見せることを示す。そして、イディオムのこのような特性を考察することにより、「ない」が形容詞としての機能を保持しつつ他の要素と結合して別の表現を作り出す語彙化のプロセス—例えば、「つまらない」のような語彙化した形容詞が、もともと「動詞+形容詞のない」の連鎖であり、ついで、動詞が形容詞の「ない」に抱合され、その後、動詞が動詞としての性質を失い一語の形容詞となったプロセス—が存在したのではないかと論じる。実際、イディオム的な形容詞表現を詳しく見てゆくと、(1)動詞と形容詞「ない」が独立していた段階、(2)動詞が統語的に形容詞の「ない」に抱合される段階(動詞と形容詞がまだ完全には一体の語とはなっていない段階)、(3)動詞と形容詞が完全に一体化し複合形容詞になった段階が存在したことを示唆する特徴(名残)があることが示せる。さらに、本論で検討するイディオムは、形容詞の性質を保持しながらも、否定辞としての機能も持っており、このタイプの「ない」に対して、どのような統語的な振る舞いが予測され、そのことから理論的にどのような帰結がもたらされるかについても検討する。

## 8. 日本語右方転移文の左方移動分析：情報構造の観点から

黒木暁人  
東北大学専門研究員

変形生成統語論において、従来日本語の「右方転移」/後置文には概略、(i)転移される要素が文字通り右方へ移動するとする右方移動分析、(ii)多重節構造に基づき、後続節に削除が適用され派生するとする削除分析、(iii)述部の左方移動により派生される左方移動分析が提示されている。本発表では、当該構文に特有とされる(cf. Endo 1996)モダリティを表す形態素「よ」に焦点を当て、情報構造と統語原理の観点から、当該構文が述部の左方移動により派生されなければならないと主張する。

(1b)の「右方転移」文は、文中の任意の要素が一見「右方」へ転移/後置されるように見える構文であるが、移動(転移)の方向性を考えると、別の可能性もある。(1a)を基底とし(1b)が派生されるとする。

- (1) a. [NP 太郎は][VP 起きた]。  
b. [VP 起きた]よ, [NP 太郎は]。

名詞句の移動を中心に据えると、(1b)では名詞句「太郎は」が右方転移されると考えられる。しかし同時に、動詞句「起きた」が左方移動によって派生するとも考えられ、この操作は動詞句前置と呼ばれる(cf. Hoji et al. 1989)。では、(1b)に名詞句ではなく動詞句の移動が重要に関わるとすると、どのような理由でこの操作が適用されるのだろうか。これを考える時、この構文が倒置文(綿貫2006)と考えられていることがヒントとなる。一般的に倒置は以下に定められる。

- (2) 倒置：強調などのために、普通の語順と反対にする。

(2)において倒置には、(i)強調(新情報)が関わること、そして(ii)「普通」の語順と反対にすることが記される。ここで、「普通」の語順とはどのように定義づけられるだろうか。談話における情報構造では、「旧-新」の組み合わせが無標の情報構造であるとされる。井上(1983)はこれを情報構造における「旧から新への原則」が働くからだと説明する。

- (3) 情報構造における「旧から新への」原則：情報が効率的に流れるには、聴者に「何について語られようとしているか」が意識されていること、すなわち旧情報が与えられており、その上で新情報が伝えられることが望ましい。

(3)に従うと情報構造における「普通」の語順とは、まず文頭に旧情報を持つ要素が表れ、その後に新情報が続く旧-新の順番である。これを踏まえると、(1a-b)の「普通」の語順は、主語に主題標識が標示される名詞句が先行する(1a)であり、談話的な焦点機能(cf. 益岡1991)を持つモダリティ「よ」が標示された動詞が文頭にくる(1b)ではない。そして倒置が適用され(1b)が派生されるとすると、(4)の移動原理(Chomsky 1995)によって、この操作の対象が焦点となる動詞句でなければならないと説明される。

- (4) 最後の手段：移動は、移動要素(移動の標的)の持つ素性が照合されるときに限り行われる。

(4)に従うと、当該構文の派生に旧情報の要素(名詞句)が移動の対象となることは原理的に許されない。したがって、(1b)では強調されるべき要素を担う動詞句が操作を受ける唯一の対象となると説明される。このように情報構造と統語原理に基づくことで、日本語「右方転移」文には名詞句の移動ではなく、動詞句の左方移動が重要に関わることが示される。発表では、本分析の帰結として日本語の統語構造についても言及し、これがKayne(1994)による反対称的統語理論に合致すると述べる。

## 9. Agree, Control and Complex Predicates

Hiroto Hoshi  
Akita University

Yoko Sugioka  
Keio University

**Background:** (1a) is an instance of the small clause (SC) construction in Japanese, and (1b) is the English counterpart.

- (1)a. John-ga *Mary-o kasiko-ku* omot-ta. (Kikuchi & Takahashi 1991)  
b. John considered *Mary intelligent*.

By showing the data below, Kikuchi & Takahashi (1991) suggest a generalization that the SC without the SC subject cannot move in Japanese (\*2a), whereas it can in English (√2b).

- (2)a. \*[kasiko-ku]<sub>i</sub> John-ga Mary-o *t<sub>i</sub>* omot-ta.  
b. [How intelligent]<sub>i</sub> did John consider Mary *t<sub>i</sub>*?

This cannot be entirely correct, however. Chomsky (1981) observes that (3) is totally out (more specifically, much worse than wh-island effects), and claims that the movement in question is impossible in the *tough* construction like (3) (see \*2a=\*3 vs. √2b).

- (3) \*[How intelligent]<sub>i</sub> is John<sub>j</sub> possible to consider ∅<sub>j</sub> (to be) *t<sub>i</sub>*? (Chomsky 1981)

**Proposal:** In this paper, we propose an analysis based on (4a-b), etc., which explains the properties of SCs in Japanese and English.

(4)a. Complex predicates can be formed only within the domain of lexical categories, because feature percolation/inheritance necessary for complex predicate formation at AS/LCS is blocked by formal features such as Agreement/Case/EPP features (Hoshi 2006).

b. Japanese *v* cannot trigger Agree (cf. Fukui 1986, etc.), and thus, the subject within SC cannot have its formal features licensed by *v* (\*5a). On the other hand, English *v* triggers Agree, and allows the SC structure (5b).

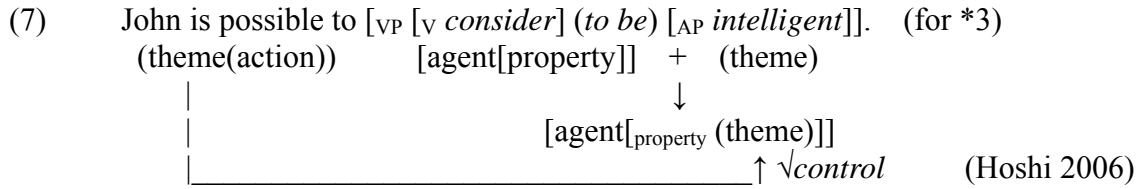
- (5)a. \*John-ga [<sub>VP</sub> [<sub>VP</sub> [<sub>SC</sub> Mary-o kasiko]-ku omot] *v*]-ta. (for 1a)  
↑ \_\_\_\_\_ | \*Agree  
 b. John [<sub>VP</sub> *v* [<sub>VP</sub> considered [<sub>SC</sub> Mary intelligent]]]. (for 1b)  
| \_\_\_\_\_ ↑ ✓Agree

As an Agree-less language, Japanese is thus forced to utilize complex predicate formation for SCs such as (1a), as below:

- (6) John-ga Mary-o [[<sub>AP</sub> *kasiko*] *ku* [<sub>V</sub> *omot*]] ta. (for 1a) (Sugioka 2007)  
✓ *complex predicate*

Under this proposal, *Mary-o* is the direct object of the syntactic complex predicate [[<sub>AP</sub> *kasiko*] *ku* [<sub>V</sub> *omot*]] (cf. Kitagawa 1987, Kikuchi & Takahashi 1991, Takezawa 1998, Koizumi 2002, Kawai 2006), so it is correctly predicted that a part of the complex predicate, [[<sub>AP</sub> *kasiko*] *ku*], can never undergo movement, as in (\*2a) (Principle of Lexical Integrity). In contrast, English example (2b) is well formed, because given structure (5b) involving Agree, [<sub>AP</sub> *How intelligent*] does not have to be a part of a complex predicate.

Finally, we explain (\*3) as follows: The *tough* predicate in (\*3) is a control predicate whose theme argument obligatorily controls a “target” (theme/patient) of its action argument at argument structure (cf. Lasnik & Fiengo 1974, Culicover & Jackendoff 2005). In (\*3), [<sub>V</sub> *consider*] is an action predicate, but lacks a “target”/theme argument. To establish a proper semantic control required by the *tough* predicate *possible* in (\*3), [<sub>V</sub> *consider*] is forced to undergo complex predicate formation with [<sub>AP</sub> *intelligent*], as below:



Here, thanks to the complex predicate formation, the theme subject successfully controls the theme argument of the complex predicate [<sub>VP</sub> [<sub>V</sub> *consider*] (*to be*) [<sub>AP</sub> *intelligent*]]. Consequently, [<sub>AP</sub> *intelligent*] in (\*3/7), being a part of the complex predicate, cannot undergo movement (cf. √2b). Thus, the parallelism between Japanese example (\*2a) and English example (\*3) is uniformly captured under our proposal.

In the paper, we will give additional evidence for the complex predicate analysis in (6) and (7), and also discuss potential problems as well as their theoretical implications.

## 10. 不定詞節を伴う認識動詞構文の言語間比較： 動詞分類と経験者句の統語的役割

竹沢幸一  
筑波大学

(1)に示す英語の *seem* などの不定詞補文を伴う認識動詞に見られるいわゆる主語繰り上げは NP 移動現象の典型例として取り上げられてきた。

(1) [The story<sub>i</sub> seems to everyone [~~the story<sub>i</sub>~~ to be interesting]]

しかし言語比較の観点から見ると、英語ではなぜこうした移動が起こるのかに関して非常に興味深い疑問点が浮かび上がる。たとえば表面上(1)と同じ形を持つ(2)の日本語認識動詞構文では主節の主語特徴を示すのは主格でマークされた「その話が」ではなく、経験者と格句「みんなに」である (Takezawa 1993)。

(2) みんなにその話が面白そうに思える (こと)

また、アイスランド語では経験者と格の有無によって、主節主語位置に移動する要素が異なることが指摘されている (Holmberg and Hróarsdóttir 2003)。

(3) a. [Ólafur<sub>i</sub> viðist [~~Ólafur<sub>i</sub>~~ vera gáfaður]]

*Olaf-nom seem(sg) be intelligent* ‘Olaf seems to be intelligent’

b. [Mér<sub>i</sub> viðast mér<sub>i</sub> [hestarnir vera seinir]]

*me-dat seem(pl) the-horses-nom be slow (lit)‘To me seem the horses to be slow.’*

つまりこの言語では(3a)のように経験者句が現れる場合には経験者自体が、また現れない(3b)の場合には、埋め込み主語が主節主語位置に繰り上がる。本発表では、不定詞節を伴う認識動詞に見られるこうした言語間および構文間の変異が動詞の語彙特性に基づいて説明されることを論ずる。

具体的な主張は、以下の通りである。

A: 動詞は外項の出現と対格付与の二つの特徴に基づき次のように3分類される。

a. [+外項], [+対格] b. [-外項], [-対格] c. [+外項], [-対格]

認識動詞構文もこの3種類の変異形をもつが、どの素性指定が許容されるかは言語ごとに異なる。この素性指定の違いのために、言語間に構文的な変異が生ずる。英語の *seem* は b.、日本語の「思える」は c.、アイスランド語の *viðast* は b. と c. の両方とともに生起できる。また日本語の「思う」や英語の *believe* などは a. の指定を持ち、目的語繰り上げ/ECM 構文として具現化する。

B: c. の指定を持つ(2)/(3b)における経験者と格句は外項としての資格を持つ。したがって、主節主語位置への移動に関与する。一方、b. の指定を持つ(1)の経験者句は項としての資格を持ち得ず、受動文の格下げされた *by* 句同様、付加詞(*adjunct*)の一種として主語位置への移動にも関与しない。したがって、補文主語の主節への繰り上げを阻止することもない。

### 参照文献

Holmberg, Anders, and Thorbjörg Hróarsdóttir. 2003. Agreement Icelandic raising constructions. *Lingua* 113:997-1019.

Takezawa, Koichi 1993. A comparative study of *seem* and *omoe*. In *Argument Structure: Its Syntax and Acquisition*, ed. Heizo Nakajima and Yukio Otsu, 75-102. Kaitakusha.

## 11. CAUSATIVES MEANING PASSIVE REVISITED: Toward a unified account of morphological causatives and passives in Korean

Hiroschi Aoyagi  
Nanzan University

This paper attempts to argue for a unified analysis of morphological (i.e. short-from) causatives and passives in Korean under the realm of the Bare Phrase Structure Theory (BPST, Chomsky 1995) and Distributed Morphology (Halle & Marantz 1993). It is well known that, despite lexical idiosyncrasy, many Korean verbs suffixed with *i*, *hi*, *li*, *ki* are ambiguous between causative and passive, as shown in (1)

- (1) a. emeni-ka aitul-ekey ku chayk-ul ilk-hi-ess-ta (causative)  
mother-nom children-dat that book-acc read-caus-past-decl  
'Mother made the children read the book.'  
b. ku chayk-i (aitul-ekey) ilk-hi-ess-ta (passive)  
that book-nom children-dat read-pass-past-decl  
'The book was read (by the children).'

We propose that the same morphological word *ilk-hi* is inserted to the complex head  $\sqrt{\text{READ}+\nu+\nu}$ . However, the second  $\nu$  is introduced to the derivation in different ways.

- (2) a. [TP emeni [<sub>VP</sub> <emeni> [<sub>VP</sub> aitul [<sub>VP</sub> ku chayk  $\sqrt{\text{READ}}$  \* $\nu$ ] \* $\nu$ ]-ess]-ta  
b. [TP ku chayk [<sub>VP</sub> (aitul) [<sub>VP</sub> <ku chayk>  $\sqrt{\text{READ}}$ ] [\* $\nu$  \* $\nu$ - $\nu^{0/\text{max}}$ ]]-ess]-ta

In the causative sentence in (1a), the second  $\nu$  is Merged with  $\nu\text{P}$ , as shown in (2a). On the other hand, in the passive sentence in (1b), the second  $\nu$  is base Merged with the first with the latter projected, as shown in (2b) (order irrelevant, though). It is widely assumed that the full-fledged light verb (indicated as \* $\nu$  in (2)) has a D feature which induces the EPP effect. However, if we take BPST at face value, when two  $\nu$ 's are base Merged, only one of them may project. As a result, the other one, being unprojected, counts as  $\nu^{\text{max}}$  as well as  $\nu^0$ , as indicated in (2b). We take this to be the way an external theta role is suspended in passives in Korean.  $\nu^{\text{max}}$  adjoined to \* $\nu$  absorbs the latter's external theta role due to the D feature associated with the former (i.e.,  $\nu^{\text{max}}$  counts as the external argument of \* $\nu$ , which is analogous to Baker, Johnson & Roberts' 1989 analysis of the English passive morphology). In return, the D feature of \* $\nu$  in (2b) is checked against the same feature of  $\nu^{0/\text{max}}$ ; hence, it need not have a Spec (dethematized *aitul* 'children' does not count as one). In (2b) *ku chayk* 'that book' is moved to [Spec, T] for an EPP/Case reason. Note that although two  $\nu$ 's are introduced to the derivation differently in (2a, b), the linear strings of relevant heads obtained in PF (either by head movement or by morphological merger, the choice between the two being immaterial) are the same (i.e.  $\sqrt{\text{V}+\nu+\nu}$ ). Hence, we need only one rule of Vocabulary Insertion (VI) for both the causative in (1a) and the passive in (1b), as follows:

- (3)  $\sqrt{\text{READ}+\nu+\nu} \rightarrow \text{ilk-hi}$

Our analysis brings about some significant consequences. Among others, it provides an account for those sentences which are ambiguous between causative and passive readings (cf. Washio 1993), as exemplified in (4).

- (4) emeni-ka Chel-ekey son-ul ssis-ki-ess-ta  
mother-nom C.-dat hand-acc wash-suf-past-decl  
causative: 'Mother made Chel wash his hands.'  
passive: 'Mother had her hands washed by Chel.'

It seems plausible to assume that reflexive verbs like *sis-ta* 'wash (one's own body)' constitute a subclass of those verbs which allow possessor ascension (cf. Nakamura 1999) and that when the denoted action is directed to someone else's body part, an applicative head  $\nu_{\text{APPL}}$  is introduced. As in (2a),  $\nu\text{P}$  headed by \* $\nu$  can be embedded under another \* $\nu$ , deriving the causative reading of (4), as indicated in (5a). There is no a priori reason to limit the number of  $\nu$ 's per clause to be two. If a third  $\nu$  is adjoined to the lower \* $\nu$  in (5a), the external theta role of the latter is suspended (though it can be transmitted to an adjunct) as in (5b), resulting in the passive reading of (4).

- (5) a. [TP emeni [<sub>VP</sub> <emeni> [<sub>VP</sub> Chel [<sub>VP</sub> [DP <Chel> son]  $\sqrt{\text{WASH}}$  \* $\nu_{\text{APPL}}$  \* $\nu$ ]-ess]-ta  
b. [TP emeni [<sub>VP</sub> <emeni> [<sub>VP</sub> (Chel) [<sub>VP</sub> [DP <emeni> son]  $\sqrt{\text{WASH}}$  \* $\nu_{\text{APPL}-\nu^{0/\text{max}}}$  \* $\nu$ ]-ess]-ta

Since *Chel* in (5b) is degraded to an adjunct, it does not block the movement (i.e. possessor ascension) of *emeni* 'mother' from within the object to Spec of the higher \* $\nu$ . Notice that we need only one rule of VI for the verbal complexes in (5a, b).

- (6)  $\sqrt{\text{WASH}+\nu_2} \rightarrow \text{sis-ki}$  (where  $X_n$  indicates n or more occurrences of X)

If the root V is merged with two  $\nu$ 's or more, no matter how they are introduced to the derivation, the verbal complex is spelled out as a suffixed verb.

### Selected references:

- Baker, M., K. Johnson, & I. Roberts. 1989. "Passive arguments raised," *LI* 20:2.  
Nakamura, W. 1999. An entailment-based account of "possessor raising," *Harvard Studies in Korean Linguistics* VIII.  
Washio, R. 1993. "When causatives mean passive: a cross-linguistic perspective," *JEAL* 2:1.



## 12. 現代日本語の格配列と認可のプロセス —分散形態論の枠組みから見えるもの—

依田悠介  
大阪外国語大学大学院

本発表では、現代日本語における格交替現象特にガ/ノ可変および、(1)のような名詞化を中心に、統語素性と音韻素性という二つの素性の一致による統語派生を提唱する。

- (1) a. ヤマハが200 人の新卒を採用する  
b. ヤマハの200 人の新卒の採用

(1)のような格配列に対して、青柳2006・Fukui and Nishigauchi1992 などは非階層構造からのアプローチを用いて説明している。だが、彼らの議論には、格交替や、基本語順などを観察すると、経験的な問題が含まれていることに気づく。

福井・西垣内の議論では、ガ格及び、ノ格をデフォルト格としているが、以下の様な同じ環境下で生じる格交替を説明することができない。

- (2) [太郎{が/の}働く]書店

(2)の経験的な問題を解決する枠組みとして、本発表では、生成文法理論の標準的枠組みの階層的統語構造における一致及び、Fukui and Takano1997 らで提出されている線形化を用いて分析する。

本発表では、福井らの採用する分散形態論(Halle and Marantz 1993)の枠組みの(3a.)と、(3b.)の仮説を用いて、日本語における格交替現象を検証する。

- (3) a. 統語計算において問題となるものは「語」ではなく、統語素性の束である。  
b. 統語素性の計算が終了した後、音韻素性の照合に付帯し分割が生じ、音形が決定し、線形化された文が生成される。

(3)を採用した帰結として(4 a.b.)が生じる。

- (4) a. 狭義の統語計算の内部で線形化された文とは独立し、統語素性は一致の上解釈される  
b. 狭義の統語計算とは独立して、音韻素性は一致の対象となり、適正な音形式を保障する。

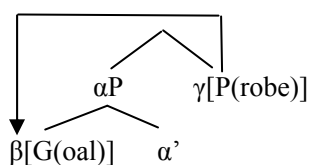
すなわち、既存の統語素性による表層形式の派生ではなく、分割による音韻素性の一致を介することにより、派生の早い段階で格の一致を受けた名詞句が上位に移動し、移動先で再び一致操作の対象となることが可能になる。格の素性は、[Case(構造格),case(形態格)]から成り立ち、両者の値が決定するまでは、「格の上書き」が可能であると主張する。一例を挙げれば、Hiraiwa2005 のガ/ノ可変の分析を例とすると、

- (5) 太郎{が/の}推薦する喫茶店。

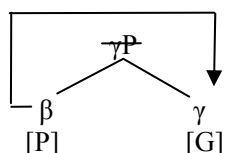
(5)の従属節内部の名詞句は、補文連体形述語による要請でTP 指定部から、FinP 指定部へ移動すると分析されている。この場合、移動前の位置ですでに一致を受けている必要がある名詞句が、FinP 指定部に移動し、属格で一致を受けるとしている。ここで、通常の格フィルターを仮定した場合、単一名詞句に二つ以上の格が与えられ非文を導くと予想されるが、事実はそうではない。

このような現象に対し、低い位置で統語素性における抽象的な格の一致を統語論で受け、さらに上位に移動し、格の一致を再び受け(格の上書き)統語計算が終了し、音韻部門における線形化を受けた際に、名詞句に付帯する格の音韻素性が、主要部と一致する(cf.三原2004 相対化素性照合)とすると、事実上の上書きに対し、適切に説明することが可能である。

- (6) 階層的統語派生における素性照合



- (7) 線形化適用における素性照合



### 13. 現代韓国語の2種のアスペクト形式における「存在」意味の相違 — <-ko iss->、<-e iss->と存在動詞< iss->との関係 —

金京愛  
京都大学大学院

現代韓国語（以下、韓国語と略す）には<-ko iss->と<-e iss->の二つのアスペクト形式がある。本発表では、<-ko iss->を含む文と<-e iss->を含む文ではそれぞれ構造が異なり、存在するものについての主張が異なっていることを明らかにする。

- (1) a. [ai-ka] [nol-ko iss-ta.] 「子どもが遊んでいる。」  
b. [[ai-ka nol-]ko] iss-ta. 「子どもが遊んでいる。」  
(2) a. [elum-i][nok-e iss-ta.] 「氷が溶けている。」  
b. \*[[elum-i nok-]e] iss-ta. 「氷が溶けている。」

本発表では、<-ko iss->を含む文は(1)に示すような二つの構造が想定できるのに対して、<-e iss->を含む文は(2)のように一つの構造のみを許すと考える。つまり、<-ko iss->の<iss->は、-ka/i 「-が」格で表される個体(=ai)が存在していることを表す(=1a)こともでき、またあるイベント(イベントというのは時間の中で生起・(展開・)終了する出来事を表す)(=ai-ka non-ta 「子どもが遊ぶ」というイベント)が生起していることを表す(=1b)ことも可能であるのに対して、<-e iss->の<iss->は、イベントの存在を表すことはできず(=2b)、-ka/i 「-が」格で示された個体の存在を表す(=2a)ことだけが可能であると主張する。この主張を支持する根拠には以下の二つがある。

まず金(2006)では、<-ko iss->と<-e iss->の機能について考察を行い、<-e iss->が動詞に後接するためには主語の位置に表れる個体が存在していなければならないと結論づけた。<-ko iss->とは違い、<-e iss->は、①cungke-ka epseci-ta 「証拠が消える」のように状態変化を被った変化対象がなくなった場合には実現できないからである。もし<-e iss->がイベントの存在をあらわすことができるのであれば、①の場合にも<-e iss->が実現されるはずである。しかし、述定対象(本発表では個体)の存在が消えてなくなった場合だけ<-e iss->が実現されなかったということは<-e iss->の<iss->が表しているのはイベントではなく述定対象(=変化対象)の存在であるということを示している。

次に<-e iss->が個体の存在をあらわしていることは-eyse 「-で」と-ey 「-に」との共起可能性からも確認することができる。中右・西村(1998)では、日本語の「に」と「で」について、「に」は<個体の位置>を合図するのに対して、「で」は<状況の位置>を合図すると主張し、位置の項が「に」と「で」いずれの格標示で合図されるかは、「が」格の項が<個体>か<状況(本発表ではイベント)>かの違いによって決まる」という一般原理をまとめている。実際に、<-ko iss->を含む文は-eyse 「-で」と-ey 「-に」の両方と共起可能であるのに対して、<-e iss->を含む文は-ey 「-に」とは共起可能であるが、-eyse 「-で」とは共起できない。

従って、<-ko iss->は「イベント」の存在も、「個体」の存在も表すことができるが、<-e iss->は「個体」が存在していることのみ表すことが可能である。